

諏訪地域の小宮御柱祭継承のための資料保存の現状と課題 －茅野市北山地区湯川区を例として－

伊東 優作

本論の目的は、長野県茅野市北山地区湯川区を研究対象とし、主に諏訪地域で行われている小宮の御柱祭がどのように継承されているのかを明らかにし、またその過程における資料保存の現状と課題を把握するとともに、前回のコロナ禍での開催が次回の開催に向けてどのような影響を与えるかを考え、それらの解決策を資料の保存と活用を中心に探ることである。御柱祭とは、諏訪大社各四社にて、寅年と申年に行われる神事であり、正式名称を諏訪大社式年造営御柱大祭という。諏訪大社で行われる御柱祭を「本宮」というのに対し、同年の8月から10月にかけて諏訪大社の摂社・末社や、諏訪地域の各集落の鎮守神・産土神が祀られた神社にて行われるのが「小宮祭」である。小宮の御柱祭が諏訪地域の人々とどのように結びつき、どのような機能を果たしているのかを指摘する先行研究は存在しているが、小宮の御柱祭の継承過程に注目している研究や、またそれらの課題点を指摘する研究は現状ない。式年祭がどのように受け継がれているのかを調査することは、御柱祭が諏訪地域の人々にとってどのような存在なのかをより鮮明に明らかにすることや、式年祭における資料の役割という、資料と人の営みの関係の中でほとんど語られていない事例を示すことができる点において、有用であると考えられる。今回の調査では、諏訪地域のなかでは比較的大規模でかつ古くから行なわれている長野県茅野市北山地区湯川区の小宮祭を調査対象とし、そこへ参加している方々へ半構造化インタビューを行うとともに、インタビューで聞くことが難しかった部分を補完する形で文献調査を行った。調査によって、運営に関する情報は御柱祭の開催年の当役が活用・作成していること、技術に関するものは区の単位では保管しておらず、各町内に一任されていることが分かった。また、上社の御柱祭に参加した者が小宮の御柱祭で中心となって祭を行っていることから、上社の存在が小宮祭の祭りの内容を維持していくために重要であると考えられる。コロナ禍では、祭りの内容を変更して開催することを決定し、その内容が次回の開催時にも引き継がれるのかどうかは不明であることが分かった。また、継承に向けての懸念点としては、長持や木遣りなど、上社の御柱祭では経験しづらいことや名誉職とされてきたことで後進の育成がうまくいっていないことや、人口減少による祭りの参加者の減少、予算確保が難しくなることなどが挙げられていた。これらの調査結果を踏まえ、資料の活用状況、祭りの継承、上社の御柱祭と小宮祭の関係の3つの観点から考察を行った。特に資料に関しては、長持や木遣りなどは音源などの資料を作成すること、御柱祭に関するファイルは、別の媒体で複製し、バックアップを取るべきではないかという提案を行った。

(指導教員 村田 光司)